

アンチ・ファンタシーというファンタシー 8

キスと謎々

黒田 誠

ピーターの体現している無知と不思議な知恵について検証していく途上で、ピーターという存在には想像以上に大きな謎が隠されているらしいことが分かった。謎とは単なる情報の欠落から生じる表面的な不合理でもないし、意図的な情報の隠蔽や狡猾な言葉のすり替えが即座に謎を成立させてくれる訳でもない。謎はいかなる解析手法をもってしても、またどのようなシステム変換を施したとしても、決して解読することが出来ないという原理的な不可解さを周到に備えた、例外的に特異な言説であるからこそ正しく謎で在り続けるのだが、“謎”という形で観念空間上に顕在化してもいれば、“謎”という言葉で呼び、思念の中に取り込んで論考の手順に組み込み得るものでもまたある。

しかしながら謎は、“魔法”や“予言”や“奇跡”等のある特定の枠組みを形成する概念群と同様に、思考システムの一単位を形成する要素として堅固な職分を果たしていると同時に、思考体系の全体像を巧妙に歪め、総体としてのシステムの整合性を失墜させる破壊的要素として、実際にはその玄妙な機能を発揮することとなるのだ。これらは我々の意識構造と言語体系の背後に潜んでいる、より公汎で不可解な未知の観念空間と接合する、無気味なワームホールの入り口のような存在なのだ。これら超自然の範疇に属する概念とは、常に我々の内面意識と外界領域との重合部分に対する合理的な統一的解釈構築可能性の敷衍領域を浸食して、思考システム外部の測鉛不能なメタシステムの原理の存在を何時までも暗示し続けることになる、不吉な護符のようなものなのである。だから時には、“謎解き”の手順を通して一時的に超自然の逸脱例を自然的解釈に引き戻すことによって、さらに根源的な神秘の存在を際立たせることすら可能になってしまうこともあるのだ。

ピーターの謎について論考を始める糸口は「お母さん」にあった。ダーリング夫人は毎晩のお決まりの日課で子供達の心の中を整理している時にピーターの名前を見つけ出しても、いささかも驚きはしなかった。彼女はピーターの顔のようなものを、別のところですで見ることがあったのだという。

He did not alarm her, for she thought she had seen him before in the faces of many women who have no children. Perhaps he is to be found in the faces of some mothers also.

p. 15

ピーターを見つけてもダーリング夫人はびっくりしたりはしませんでした。ダーリング夫人は以前にも子供のいない女の人の顔の中に、ピーターの姿をみたことがあるような気がしたからでした。おそらく何人かのお母さんの顔の中にもピーターは見つけることができることでしょう。

ピーターとは、未婚の女性達や若いお母さん達の顔の上に窺われる特有の表情に類した何かなのだという。比喩表現の一種と目されていた言説がそのまま実体性を獲得し、意志性と肉体性を備えた固有の存在物として具現化してしまったかのような奇妙な記述が行われてしまっていたという訳なのだ。机上の空論に属する観念遊戯の所産とも、あるいは観念空間のみにかろうじて存在意義を主張することができる、危うい概念連合の結晶体とも看做し得るのが、この物語の主人公である少年の備えた本質的属性であったのだ。この不可思議な記号的特性を秘めた、異質のファンタジー作品の登場人物の存在の意味するものを、正しく理解するための最初の手がかりはこのような事柄であった。しかしもっと注意を払っておくべき特徴的な事実、ピーターがダーリング夫人のキスにととてもよく似ていると語られている点だろう。

If you or I or Wendy had been there we should have seen that he was very like Mrs. Darling's Kiss.

p. 16

もしもあなたか私かウェンディがそこにいたならば、ピーターはダーリング夫人のキスにととてもよく似ているのが分かったことでしょう。

キスと指貫との言葉の取り違えに基づくごちない誤解をめぐって、後ほどウェンディとピーターとの間に展開されることとなった滑稽なやりとりの場合とは対照的に、ダーリング夫人の“キス”に関しては、作者は最初から特別の配慮を払って入念に語ってくれているの

だった。“キス”はこの物語の主人公である筈のピーターの秘密についてばかりでなく、同時にまたダーリング夫人という、もう一人のこの上無く魅力的な存在自体の秘める、限りなく謎めいた神秘性を窺わせるものでもある。

She was a lovely lady, with a romantic mind and such a sweet mocking mouth. Her romantic mind was like the tiny boxes, one within the other, that come from the puzzling East, however many you discover there is always one more; and her sweet mocking mouth had one kiss on it that Wendy could never get, though there it was, perfectly conspicuous in the right-hand corner.

pp. 1-2

ダーリング夫人は素敵な女性で、ロマンティックな心を持ち、あの人をからかうような魅力的な口許がありました。ダーリング夫人のロマンティックな心はいくら開けてもまだ次から次に中から出てくる、不思議な東洋からやって来た小さな小箱のようでした。そして彼女の魅力的なからかうような口は、ウェンディがどうしても手に入れることのできないキスを一つその上に浮かべていました。右の端にあるのははっきりと見えてはいたのですけれど。

ダーリング夫人の心は入れ子箱のように奥が深い。20世紀になって宇宙の極大と極小を極めつつあった現代の物理学が改めて直面することとなった、限りなく分割を続けてもさらに新たな様相を装って現れるかのように思われる数々の素粒子群のように、論理と理性による連続的論証の過程を中断させ、理不尽にも不可解な飛躍の手順を導入することを強いる、「段階的無限」という概念を暗示させるようなものがそこにはある。

ひょっとして彼女の心を構成する小さな箱は、外側のもっと大きな箱を内側に隠し持っているのだろうか。そうだとすれば、この謎めいた玩具がああ神秘的な東洋からやって来たものであることと、何か不可思議な関係があるのかも知れない。大と小の位相空間的關係性を超越するかのように、互いを呑み込み合う大蛇の文様を用いて象徴されたウロボロスの図像^①のような神秘性が、ダーリング夫人のロマンティックな心の特徴なのだ。外宇宙と内宇宙の不可解な照応と、万物の靈妙な連関を暗示させるのが作者の心を捕らえたこの魅力的な女性なのであった。その彼女の口許に見えるキスは、ウェンディが望んでもどうしても手に入れることのできないものだった。それは目の前にありながら、同時に果てし無く遠

いところにあるものなのだ。矛盾撞着の具現化であると同時に、排中律の双方の選択肢の重ね合わせ、あるいは正反対の一致という最高級の存在属性としての手放しの称賛を与えられているのが、ダーリング夫人の口許に見えているというキスだ⁽²⁾。“キス”とは謎の暗示する世界構成軸の所在の確かな方向を指し示す、魔法の力を封じ込めた方位磁針でもあった訳なのである。

The gaiety of those romps ! And gayest of all was Mrs. Darling, who would pirouette so wildly that all you could see of her was the kiss, and then if you had dashed at her you might have got it.

p. 7

踊りまわるみんなの陽気さといったら！そしてその中でも一番活気に満ちているのがダーリング夫人でした。彼女はつま先立ってあまりに激しく回転するので、周りから見えるのは彼女のキスだけでした。その時に飛びつきさえすれば、彼女のキスを手に入れることができたかもしれません。

お母さんが踊ると余りに激しくくるくると回転するので、周囲の人に見えるのはお母さんのキスだけだという。保有するエネルギー値の臨海点を越えた瞬間、励起状態という新しい様相の許に全く異なった外観を呈してその秘匿された存在属性をあらわすことになる、世界の存立機構の枢要を解き明かす秘密の鍵の存在が、そこに暗示されてでもいるかのようだ。この無邪気な観念の遊びとも、あるいは思弁的宇宙原理把握の超出の一例とも目される属性記述の手法は、さらにお母さんのキスとPeterとの間に示される不可思議な関係を通して増幅されていくことになるのだ。

例えば、Edgar Allan Poeの「ユリイカ」(Eureka、1848)において語られている次の一節と比較対照してみると、ダーリング夫人の体現するものの指し示す思想的立脚点が、より輪郭を明らかにして現れてくることが分かるだろう。回転するものが動的投射の総合として周囲に与える凝縮的写像と、回転した結果連続的映像として回転体自身の視覚に投影される統合的世界像との間の、主客を転倒した不可思議な一致と絶妙な符牒の可能性が、そこに暗示されてでもいるかのようだ。

He who from the top of AEtna casts his eyes leisurely around, is affected chiefly by

the *extent* and *diversity* of the scene. Only by a rapid whirling on his heel could he hope to comprehend the panorama in the sublimity of its *oneness*. But as, on the summit of AEtna, *no* man has thought of whirling on his heel, so no man has ever taken into his brain the full uniqueness of the prospect; and so, again, whatever considerations lie involved in this uniqueness have as yet no practical existence for mankind.

エトナ山の山頂から悠然と周囲を見渡してみたものは、その景観の大きさと多様性に先ず心を奪われる。踵を中心に素早く軀を回転させることによってのみ、その景観の全一性の持つ崇高さを理解するが可能になると思われる。けれども、エトナ山の山頂で未だかつて何人も踵を中心に軀を回転させてみることを思い浮かべたことは無かったので、その特異性の全容に思いを馳せたものは誰もいないのである。という訳でやはり、この特異性の許にいかなる考察が包含されているかについては、未だかつて人類の実際に弁えるものとはなっていないのである。

ポーの「ユリイカ」におけるロマン主義哲学的省察の立脚点を形成する宇宙の全一性 (one-ness) の表象を、エトナ山の頂上に立って周囲をぐるりと見渡すことではなくて、自分自身が激しく回転することによって反転的に顕現させることを可能にしているのが、ダーリング夫人の母性原理の不思議な力なのであった。このような極大と極小、あるいは主体と客体の反転的な連鎖的合一という恩寵的奇跡を可能とする、世界の存立機構の秘密の所在を顕示する旗印として、確固たる機能を果たしているがダーリング夫人のキスだったのである⁽³⁾。

首尾よくダーリング夫人を妻として手に入れたダーリング氏も、彼女の心の秘密には気付いてさえいなかったし、このキスの方は程なく諦めることとなったのだった。

He got all of her, except the innermost box and the kiss. He never knew about he box, and in time he gave up trying for the kiss.

p. 2

ダーリング氏は彼女の全てを手に入れました。一番奥の箱とキスを除いては。ダーリング氏は箱のことは決して知ることはありませんでしたし、キスの方はまもなく手に入れようとするのをあきらめたのでした。

ところがウェンディをダーリング家に送り返しに来た時、ピーターはいとも簡単にこのキスを自分のものにしてしまったのだという。

He took Mrs. Darling's kiss with him. The kiss that had been for no one else Peter took quite easily. Funny. But she seemed satisfied.

p. 254

ピーターはダーリング夫人のキスを持って行ってしまいました。他の誰にも手に入れることのできなかつたキスをピーターはいともたやすく取ってしまったのです。不思議です。でもダーリング夫人は満足しているようでした。

ピーターに関わる謎の謎解きに当たるものは、ここでは敢えてするまい。謎は謎であることに謎としての第一の意味がある。しばらくは謎の所在を確かめるだけで充分だ。アイロニーについて語る言葉がアイロニーを含んでいなければならないのと同様に、謎について語る際には、まず謎の振幅を最大限に増幅しておくのが手順だ。一つだけ確かなことは、あり得ない世界の実現不可能な出来事を語るファンタシーの言説行為とは、存在不可能な事実をもっともらしく語るという点では紛れもなく嘘を語る技であるには相違ないのだが、文字通りのナンセンスと妄言に墮することなくその虚偽が弁証可能な意味を持ち得るのは、いかなる公理系においても決して成り立つことのない特異な命題として、公理の存在そのものの立脚点を根源的な部分から脅かす、啓示的なアポリーアとして機能する限りにおいてでしかあるまいということだ。

ファンタシーの時空を形成するための必須条件として存在すると思われる、“超自然”の要素を鮮やかに反映した概念として“謎”という言葉捉え直してみることにすれば、例えば自然科学のメカニズムが行ってきたように、どうしても既存のシステムに適合しない、従来のシステム理論を破綻に陥れると思われていた微細な夾雑物的要素をこそ核として、システム全体のメタシステムの修正を施すことによって、より高次のシステム構築を企てようと常に模索する帰納的方法論そのものにほころびを生じさせる、決定的な“不自然さ”の要素の結晶化した要因が、“謎”として現出することになるのだ。

ピーターは女性に訴えかける絶対的な力を持っている。それは彼のまだ抜け変わっていない乳歯に象徴されているようだ。

He was a lovely boy, clad in skeleton leaves and the juices that ooze out of trees, but the most entrancing thing about him was that he had all his first teeth.

p. 20

ピーターは可愛い少年で、枯れ葉と木の樹液を身にまとっていました。でもピーターのもっとも魅力的なところは、ピーターが乳歯を全部持っていたことです。

誰もが一目で「生え変わったことが無い筈」のものだと確信するピーターの歯の魅力とは、厳密な分析的検証を加えた結果に得られた、「彼の歯がまだ生え変わっていない」という客観的判断が彼の魅力を判定する条件になっている訳では決してある筈がないことを考慮に入れてみれば、圧倒的に見るものの心を支配する彼の絶対的な魅力が、「当然彼の歯が一度も生え変わってなどいない筈だ」という奇妙な確信を与えるという、因果関係の倒置を通して得られた超越的属性の記述という独特のレトリックで語られているところにこそ、最も重要な意味が見出されなければならないものだ⁽⁴⁾。だからピーターはウェンディに対しても、やはり抗いようのない力で、不可思議な誘惑の手を差し延べることになるのだ。

“Wendy,” he continued, in a voice that no woman has ever yet been able to resist...

p. 40

「ウェンディ、」ピーターはこれまでどんな女の人も抵抗することができなかった声で続けました。

全ての女性に対して絶対的な影響を及ぼす力を持っているくせに、ピーターは何故か肝腎の母親という存在に対しては強い不信の念を抱いている。彼はネヴァランドでは、暴君的な権力を行使しさえもして、手下の少年達に彼等の母親の話をするを堅く禁じている程だ。

It was only Peter's absence that they could speak of mothers, the subject being forbidden by him as silly.

p. 84

子供達がお母さんのことを話せるのはピーターがいない時だけでした。この話題はピー

ターによっておろかしいことだとして禁じられていたのです。

ウェンディが子供達にお話をしてくれて、母親の愛の限りない大きさについて語り始めた時も、ピーターだけは気が乗らない様子だった。

“If you knew how great is a mother’s love,” Wendy told them triumphantly, “you would have no fear.” She had now come to the part that Peter hated.

p. 165

「もしもあなたたちがお母さんの愛情がどんなに大きなものか知っていたら、」ウェンディは勝ち誇ったように言いました。「なんにも恐れることはないのよ。」ウェンディのお話はピーターが嫌っていたところに近づいてきました。

そしてピーターは、彼だけが経験したある秘密を子供達に語るのだ。お母さんに閉め出された忌まわしい体験を。(p. 167) お母さんに身勝手にも絶大の信頼をよせている子供達とピーターが決定的に異なるのはこの部分だ。ピーターにとってお母さんとは、何故なのか激烈な嫌悪の対象となるものでしかないようだ。

Now, if Peter had ever quite had a mother, he no longer missed her. He could do very well without one. He had thought them out, and remembered only their bad points.

p. 173

さて、もしピーターが以前にお母さんを持っていたとしても、ピーターはもうお母さんのことを恋しいなんて思っていないで済んでいました。ピーターはお母さんなしで十分うまくやっていけました。ピーターはお母さんのことは考え尽くして、[傍線筆者]お母さんの悪いところばかり覚えていたのです。

ピーターは子供達の誰よりも自由で大きな権力を振るうことができながら、誰よりも辛く耐え難い記憶らしきものを持っていてもいる⁽⁵⁾。それがピーターの謎を形成する極めて不可解な要素の一つであることは間違いのないことのようにだ。

Sometimes, though not often, he had dreams, and they were more painful than the dreams of other boys. For hours he could not be separated from these dreams, though he wailed piteously in them. They had to do, I think, with the riddle of his existence. [傍線筆者]

p. 190

しばしばではなかったけど、時々ピーターは夢を見ました。そしてその夢は他の子供達の夢より辛いものでした。悲しげにうめきながらも、ピーターは何時間もこのような夢からのがれることができないでいました。私は思うのですが、そのような夢はピーターの存在に関わる謎と何か関係があるのじゃないでしょうか。

ピーターは母なる大地の中に憩う、溢れるばかりの祝福を受けた特権の享受者であると同時に、自分を生み出した造物主たる母親と限りなく離反せざるを得ないという、永劫の呪いを背負った故郷からの追放者でもあるかのようだ⁽⁶⁾。彼の母親一般に対する理不尽な遺恨の念は相当に深い。子供達と共にダーリング家に戻り、ダーリング夫人の姿を目にしたピーターはティンカー・ベルにこう言う。

“It’s Wendy’s mother. She is a pretty lady, but not so pretty as my mother. Her mouth is full of thimbles, but not so full as my mother’s was.”

p. 242

「あれはウェンディのお母さんだ。きれいな人だ。でもほくのお母さんほどきれいじゃない。あの人の口は指貫で一杯だ。でもほくのお母さんの方がもっと一杯あった。」

こともあろうに、この作品において限らない慈悲と寛大さに満ちた守護天使とも、またいかなる重罪人をも決して見捨てることはない情愛豊かな妖精の後見人（フェアリー・ゴッドマザー）とも看做すべき役割を果たすダーリング夫人に対して、ピーターは理不尽な敵意をこそ奮い立たせるのだ。しかもウェンディによって植え付けられた誤解から、肝腎のダーリング夫人の“キス”を“指貫”と呼び違えてしまいさえもしている。けれども今はもうウェンディと、彼女のお母さんのダーリング夫人との関わりを通して“キス”というものの秘める深い真実を、表裏一体の二重の意味で知ってしまったピーターは、自分の心の奥底で疼く

痛みをここでは自覚している訳だ。ダーリング家の子供達とも別れ、これまでは彼の忠実な手下として常に一緒に暮らしていたロスト・ボーイズ達をもダーリング家に残して立ち去るピーターは、最後に窓から子供達の方を振り返る。

He had ecstasies innumerable that other children can never know; but he was looking through the window at one joy from which he must for ever barred.

p. 247

ピーターはほかの子供達には決して知ることのできない数多くの喜びを知っていました。けれどもピーターが窓越しに見ているのは、ピーターには永遠に禁じられている一つの喜びでした。

“キス”とウェンディというこれまでかつて味わったことのないものを経験してしまったピーターにとって、このダーリング家の子供達を巻き込んで引き起こしてしまった一件は、さぞかし特別なものであったことだろう。そしてまた、ウェンディとロスト・ボーイズを失うと共に、お母さんのキスを奪って持って行ってしまうという、相補的な見事に円環的に完結した行為を完遂してしまったというのが、このお話においてピーターの行った冒険として語られていた顛末の意味する厳粛な事実なのであった。だとすればひょっとして我々は、この物語においてピーターという神格のかつて経験したことの無い、歴史的な転機を目にしたことになるのであろうか。ここにおいて宇宙の生成展開は新たな位相発現の局面を迎え、世界に斬新な新世紀の誕生をもたらすことになるのだろうか。一見したところは、そのようにも考えられるかもしれない。しかしながら実際のところは決してそうではないのだ。ティンカー・ベルを連れてダーリング家を立ち去る時のピーターは、すでにこのように描かれているからだ。

“Oh, all right,” he said at last, and gulped. Then he unbarred the window. “Come on, Tink,” he cried, with a frightful sneer at the laws of nature.[傍線筆者]

pp. 243-4

「うん、平気さ。」ピーターは最後に言いました。そして息をのみました。それからピーターは窓を開けました。「おいで、ティンク。」ピーターは自然の法則に対して凄い嘲りの

表情を浴びせかけながら叫びました。

ピーターがこの場面で嘲笑したという「自然の法則」とは一体何であったろう。それはひょっとして、生きるものは全て経験し、成長し、変化するという苛酷な宿命のような、我々のすべてを等しく支配しているあの呪縛のことであったろうか。そうであるならば、ピーターはこの物語に描かれたエピソードの結果、やはり何らかの変化を被っている訳ではないのだ。何故ならばピーターは、忘れてしまうからだ。フックによる裏切りも忘れ、フック自身のことも後にはすっかりと忘れてしまっていた。むしろピーターの体現する深い謎の秘める意義は、彼の存在そのものが自然法則を成り立たせる合理的推論に対する嘲笑として、すなわちシステム構築不能性をもたらす恒久的な原動力として不断に機能し続けている点にこそ見出されるべきものであった筈なのだ。

あるいはまたピーターの身に帯びている謎は、フックとの関連から照明をあててみることも出来るだろう。ピーターとフックは並び立つことの不可能な仇敵同志であるが、フックがピーターに対して抱く執拗な憎しみの念について作者はこのように語っているのだった。

Peter was such a small boy that one tends to wonder at the man's hatred of him. True he had flung Hook's arm to the crocodile, but even this and the increased insecurity of life to which it led, owing to the crocodile's pertinacity, hardly account for a vindictiveness so relentless and malignant.^[傍線筆者] The truth is that there was something about Peter which goaded the pirate captain to frenzy.^[傍線筆者] It was not his courage, it was not his engaging appearance, it was not-. There is no beating about the bush, for we know quite well what it was, and have got to tell. It was Peter's cockiness.

p. 182

ピーターはこんなにも小さな子供でしたので、この男がピーターのことをこれほどまで憎むことに驚きの思いを抱く人もいるかもしれません。確かにピーターはフックの腕を鰐に食べさせてしまいました。けれどもこの事とその結果鰐の執拗さのために導かれた生命の危険ということだけでは、これほど容赦のない悪意に満ちた恨みの念を説明することはできません。実際のところは、ピーターのどこかにこの海賊船の船長を狂気に駆り立てるものがあったのです。それはピーターの勇気でもなく、ピーターの見栄えのする容姿でもありません、それは…。あれこれ詮索する必要はないでしょう。それが何であるかは私た

ちはとてもよく知っているはずです。だから言ってしまうなければなりません。それはピーターの生意気さでした。

ピーターがフックを不倶戴天の宿敵であると見なす理由が、生死を賭けた抗争と関わる実際的な利害関係などとは無縁のところにあったように、フックがピーターに対して抱く限らない憎悪の念も、手を切り落とされたことで被った不便であるとか、鰐に付きまとわれることで及ぼされる生命の不安であるとか、このような実質的な利害に関する遺恨や畏怖にあるのではない。ピーターの生意気さこそが何よりもフックの気に障るのだというのだ。フックの繊細な感性にとっては、ピーターの示すこの生意気さはその高邁な精神を愚弄する、侮辱的なものでさえあるのだ。ピーターの隠れ家に忍び込んだフックは一人眠っているピーターの姿を見つける。余りにも無防備なその様を見て、心の底から邪悪である訳ではないフックは、あるいは同情の念を感じて引き返したかもしれない、とも実際に作者によって語られていた。しかし彼に足を踏みとどまらせる何物かが、確かにピーターにはあったのだ。

What stayed him was Peter's impertinent appearance as he slept. The open mouth, the drooping arm, the arched knee: they were such a personification of cockiness as, taken together, will never again one may hope be presented to eyes so sensitive to their offensiveness.

pp. 191-2

フックの足を留めさせたのは、ピーターの生意気そうな寝姿でした。口を開け、手を下にたらし、膝を立てて、その姿は生意気さを絵に書いたようなものでしたので、そのなにもかもをこんな侮辱にはあまりにも傷つきやすいフックの目の前に示すことは、二度と期待できないようなものでした。

ここに述べられているピーターの“生意気さ”も、実際のところは彼の不可解な乳歯の場合と同様に、因果関係の連鎖の転倒という巧妙な観念操作を軸にして語られた、鮮やかなレトリックの所産であることに間違いはない。敢えて擬装された真実を暴露するならば、本当のところはピーターの保持していた属性の一つである“生意気さ”がフックの心を苛立たせるのではなく、ピーターの存在自体が否応も無くフックを苛立たせる原因となる謎を秘めており、そのためにフックはピーターの姿に避けるべくもなく“生意気さ”という圧倒的な主

観的印象を感じ取ってしまうのだ。フックは絶え間なくピーターのために心を苛まれ続ける永遠の被害者であり、不可避的に救済される術を奪われた、宿命的な受難者なのである。この両者の関係性が主客を転倒した相互作用的現象認識に関する記述手法の展開の一例として、“生意気さ”という属性あるいは概念を採用してさりげなく語られていた、というのが事の真相なのであった。

船上での最後の戦いの際においても、ピーターの存在の謎は改めてフックの傷つきやすい心をいたぶる。哀れな受難者の海賊には、実は一つ思い当たる節があるからだ。フックはかすれた声で、「パン、お前は一体何物なのだ。」と誰何してみる。ピーターの答えはこうだった。

“I’m youth, I’m joy,” Peter answered at a venture, “I’m a little bird that has broken out of the egg.”

This, of course was nonsense; but it was proof to the unhappy Hook that Peter did not know in the least who or what he was, which is the very pinnacle of good form. [傍線筆者]

pp. 227-8

「ぼくは若さだ。ぼくは喜びだ。」ピーターはあてずっぽうに答えました。「ぼくは卵からかえったばかりのひなどりだ。」

これはもちろんなんの意味もないことでした。けれどそれは哀れなフックにとってはピーターが自分がなにものであるか毛ほども知らないということの証明でした。それこそ最高のたしなみの良さでした。

ここでもピーターの答えは、例によって当てずっぽうだ。ピーターは何一つ確かなことを知らない。そしてそのこと自体がフックにとっては痛ましいことに、ピーターが彼の唯一の弱点であるたしなみの良さの具現化であることを物語っている。ピーターは自己認識のあり方において正に「何も知らない」というそのことのおかげで、いかなる罪の意識からも、自己の存在理由に対するどのような疑念からも自由であり続けることができるからである⁽⁷⁾。ピーターにおいては「名無しの森」に紛れ込んだアリスと同様に、個体として存在する上で誰もが抱え込まなければならない筈の、執拗な縛鎖のような自意識からの解放が暗示されているのだ。けれどもピーターに与えられたこの限りない自由は、彼の体現する謎の展開領域

をさらに次元軸を加算して辿って試してみればいずれ判明するように、実はやはりこの上もなく苛酷な呪縛に他ならないものでもあったのである。

- (1) ウロボロスの形象については、他にも人間世界を取り巻いて大地の総てを形成しているという、北欧神話において語られたミッドガルト・サーペント (Jormangund) の場合のように、己の尻尾を呑み込む一尾の大蛇の姿等、様々な変身形があることが知られているが、ファンタシー文学の思想的特質における影の原理に焦点を当てて論考を展開する本書においては、“天の邪鬼”のように同形の一对として世界構成原理の巧妙な表象となる、この姿を用いてウロボロスを捉えておくこととしよう。
- (2) キリスト教神話において奇跡が果たしていたのと同様の、一般自然法則性からの絶対的な逸脱例として、超越的な神秘と極限的な崇高を暗示する選別的機能が、この“キス”という観念に仮託されていると考えることができるだろう。これは予言もしくは啓示に代替して自然法則に重ね合わせられることによって、ニュートンの宇宙論が仮定した時間と空間の均一性の主張を通して、宇宙の斉一的解釈可能性を追求しようとする一般性の論理の展開を決定的に阻むことになる、エントロピー増大の果ての熱死状態をも復元する力を秘めた、恩寵的な特殊性の論理の新たな主張となるものと考えられるべき新機軸の概念なのである。
- (3) ネオ・プラトニズム的な矛盾律の統合と近代の数学的極限概念を大胆に合体させることにより、最大であるとともに最小でもあるという悟性認識の限界を超えたキリスト教の神の新たな属性記述の方策を構想したクザーヌス (Nicolaus Cusanus) の唱えた“正反対の一致” (coincidentia oppositorum) という発想が、対立物の暗示する論理矛盾の要素に対する積極的な評価を前提としていたという点で、ファンタシーの思想的特質を形成する特有の根本認識に対して、無視することが出来ない重要な影響を及ぼしたであろうことは、やはり認めざるを得ない事実であるだろう。
- (4) こうした類いの暗喩がアイロニーという概念と本質的に密接に関連しているものであることは、これまでも様々な局面において指摘されてきた事実ではあるが、“修辞法”そのものが超自然の記述を直截的な結果としてもたらし、ファンタシーを発動させる本源的な要因として確固たる機能を保有しているものであることを改めて顧みるならば、ファンタシーという形式あるいはジャンルこそが、実は根源的な意味において文学(フィクション)の常道に他ならないものであったことが、改めて理解されねばならないこととなるだろう。
- (5) もしもどんなことでもすぐに忘れてしまい、一瞬たりとも記憶らしきものを保持することがない筈のピーターの記憶について云々することの不自然さが指摘されるとするならば、レトリックとファンタシーの関連について素朴な指摘を加えた先程の例に倣って、指示するものと指示されるものとの間のベクトルの向きを転換することによって、ピーターの持つ本源的に超自然的な属性の相互作用的発露が「記憶を持っている」、「夢を見る」、「考え尽くした」等の修辭的表現を用

いて記述される結果を招いていると考えればよい訳だ。上の註において述べられていたように、“レトリック”はアイロニーと並んで根源的にはファンタジーの基本文法を構築すべき枢軸的要素となる潜勢力として再評価されなければならない概念なのである。

- (6) 二律背反する要素の巧妙な重ね合わせという存在属性が、ピーターの謎を形成するシステム理論的核芯となっているのは間違いのないことだ。時として意味消失をもたらすナンセンスとして機能することもあるピーターの存在論的本性とは、その背後に常に合理的自然法則構築の企図を破綻に導くことになる究極的神秘と、一般命題を超越した奇跡として具現化することが目論まれる、思弁的推論から導かれうる主張可能な唯一の公理*の存在を暗示しているものなのである。

* “絶対的に真実であることなどはない。”という命題は当の命題自身をも記述対象に含んでしまうので、矛盾撞着となり、この命題が真ではないことを逆説的に証明してしまう。この種の論理形式の主張を行う際には、例えば“絶対的に真実であることなどは、この命題を除いてはありえない。”という自己を例外とする制限事項を伴う記述様態を取らざるを得ないことになる。そしてこのような形態でもって記述された命題は、一般性から遊離して特筆されるべき例外事項として、その選別的存在意義を固有のシステム理論として強硬に主張することになるのだ。類例としてはポーの「ユリイカ」における次の一節が挙げられるだろう。

...if an axiom there be, then the proposition of which we speak has the fullest right to be considered an axiom—that no *more* absolute axiom *is*; and, consequently, that any subsequent proposition which shall conflict with this one primarily advanced, must be either a falsity in itself—that is to say, no axiom—or, if admitted axiomatic, must at once neutralize both itself and its predecessor.

(もし仮に公理などというものがあるとするならば、これから述べる提言こそが公理として看做されるべき最大の権利を有するであろう。すなわち、「これ以外に絶対的な公理というものは存在しない、従って最初に述べたこの提言と齟齬を来すであろう他の提言はそれ自体虚偽のものであり、つまり公理とはなり得ないか、あるいはそれらが公理として認められることがあるならば、即座に先行したこの提言と己自身の主張を共に無効とせざるを得ないこととなる。」という一文である。)

公理の存在自体の仮定の是非を主題にしたポーのここでの指摘のように、己自身の正当性に対する疑念そのものを論点とする自己反射的論述の様相は、この章において問題とされている“謎”を成立させる根幹要素を確認するための、説得力ある指標となるべきものを提供する枢要な要因として看做し得るものだろう。

- (7) 記憶に代替すべき超越的能力としてピーターに与えられているのは、あらゆる可能態の組み合わせの全てを無作為に抽出して選択することにより、非在という結果も含めて網羅的に自らの存

在様態として現出させることが可能な、全方位的不定性の存在属性に他ならない。これが彼の得意とする“メイク・ビリーブ”という遊戯の結果的に意味するところであった。ピーターにあってはいかなる選択がなされたところで、時間的にも空間的にも因果関係性においても、主体の保持する可能性の範囲の縮小をもたらす結果を導くことは決してないのだ。人間的理解の限界である因果関係及び時間軸の方向性と展開範囲の制約を超えた、本来の意味での“永遠性”の暗示する何物かがここに現出していると考えらるべきだろう。

テキスト

James Matthew Barrie, *Peter Pan* (New Jersey: Random House, 1987)

『ピーターとウェンディ』のテキストとしては、1911年発行の初版本のリプリントである *Peter Pan*, (Random House, 1987) を用いる。以下本文からの引用は総てこの版のページで示す。*Peter and Wendy*のテキストとしては他に様々のヴァージョンが見出されるであろうが、原型を最も忠実に留めていると思われるこの版を選ぶこととする。煩瑣を避けるためタイトルは“Peter Pan”と、原題とは異なったものになっているが、本論文においては *Peter and Wendy*のテキストとしては総てRandom House版の *Peter Pan* を参照することとする。

なお、他に本論文のテキストとして用いられ得る資料としては、本書に対する相補的研究資料となることを構想して、論文局相に対しては注釈テキスト局相として、印刷物テキスト局相に対しては電算化テキスト局相として、それぞれ複合的に補完的機能を果たすことを企図して作成された *Annotated Peter and Wendy* がある。上記電算化テキスト資料は、本書において採用されたもう一方の論考対象テキストである *The Last Unicorn* に対する注釈テキストとして出版された *Annotated Last Unicorn* (近代文芸社) と相関的に機能すべく、以下のホームページその他において公開されているものである。

<http://www.linkclub.or.jp/~mac-kuro/>

これらの研究資料は、コンピュータ室における講座テキストとしての使用及び、電算化データとしての内容項目に対する効率的参照・検索の便益に適合させるために、ワード・プロセッシングソフト、“マイクロソフト・ワード”の“コメント作成機能”、及び“アウトライン表示機能”等の活用、あるいはHTML文書としての“ハイパーリンク機能”等を活用したデータ加工がなされているものである。その結果、各構成要素が論文パートと注釈テキストパート並びに活字メディアと電算化データという相補的な関係性の許に行列的に提示されることにより、論考の主軸として主張される影と本体の相反的連関性という内容を外形的

にもまた反復して、主題の複層的展開と重層的反映が図られているものである。

(英文学科助教授)